

令和7年度協働パイロット事業新規事業二次審査 会議録

開催日時 令和7年6月6日（金）午前9時30分から12時00分まで

出席者 委員 川村 美智、弓削 幸恵、千野 和子、石川 賀久
事務局 渡井 亮祐、前川 里奈

会議内容

1 新規事業二次審査説明 <事務局>

2 議事

(1) 静岡の未来を拓く会

ア 企画説明 <団体>

イ 発言等

(千野委員)

放課後子ども教室での高校生との活動は、どれぐらいの頻度を考えているか。

(団体)

月1回で考えているが、放課後子ども教室の始まる時間が14時からということもあり、高校生との調整が必要となっている。学校のスケジュールによっては午前中で授業が終わる日もあるため、なるべく放課後子ども教室の時間を変えずに、高校生と調整していきたいと考えている。

なお現在、高校生との日程調整を行ったところ、現時点で3回程度、14時からの時間帯で高校生の教育課程にも支障をきたさず、放課後子ども教室の時間も変更せずに実施できることが確認できている。

(川村委員)

心配になったのは、高校生にとって負担にならないかというところ。意欲があったとしても実際に小学生と関わるというのはとてもエネルギーがいる。高校生にとっての心の負担についてはどのように考えているのか。

(団体)

我々も懸念はしており、小学生と関わることは楽しいことばかりではないということも伝えたくて、高校生たちの強い意志を受け止めたところである。

また、放課後子ども教室を活用することの大きな理由の一つに、放課後子ども教室にいるスタッフの存在というものがある。スタッフの方たちは、毎回14名ぐらい参加しており、子どもたちの扱いや様子をよく知っている。我々としてもサポートして、常に5.6名の団体メンバーがいる体制にする予定である。サポート面でも高

校生に安心して伸び伸びと活動できる環境は整えられると考えている。

(弓削委員)

高校生と、どのぐらいの頻度で打合せや準備を行っているのか。方法としてもLINEで簡単に行うのか、実際に会って何か話し合いをするのか。予算計上にそのあたりの要素が何えず、ステップを踏まないと事業実施はきついと感じる。事業計画書に記載されていないが実施しているのであればいいが、もし実際に会って話し合いをするということであれば費用を予算の中で確保したほうがいいのか。

また、イベントにおいては、費用が多いと感じる。イベント1回、しかも色々な地域から集まった子どもたちがその場で会って話をしたとして、またすぐ解散となる。イベント実施後、そこで出会った子どもたちと高校生をどう繋いでいくのか。高校生がやりたいのは子ども教室なのか、それともふれあいイベントなのか、その辺りについてもわかる範囲で教えてほしい。

(団体)

高校生との打ち合わせは、今年度、対面で5回程度実施している。もちろんLINEのグループもあるが、細かい部分がわからないので、対面で話をするようにしている。また城北高校が私の自宅から1分と離れていないため、帰りに高校生たちが寄ってきて近況報告してくれることもあり、小さなミーティングは実施している状況。打合せに関しても、我々大人はほとんど介入せず、高校生たちの中でどういった内容にしようかというところは進めている。

また、イベントも確におっしゃる通り、この一年の段階では1回きりであるが、今後、それが広がり、その経験値がまた次の年の活動に広がっていったり、イベントの回数が増えていったりしてくれることを願い、期待をして進めていきたいと思っている。

(川村委員)

不登校を一つの課題として捉えられているが、放課後子ども教室には来れているのか。

(団体)

今回は必ずしも不登校の対処的療法ではなく、不登校になる前段階にアプローチするところ。不登校の数というのは、中学校が多くなっているものの、実はもう小学校の時点から不登校になりかねないような前兆のある子どもたちがたくさんいる。一方で、不登校に至った子どもたちをどうしていくかというのは、我々の団体の中で別のプロジェクトがある。今回は、子どもたちが安心安全な居場所を感じながら、人への信頼を少しずつ調整していくきっかけになればという思いで、このような提案に至っている。

(川村委員)

これは希望であるが、団体スタッフのうち、主要メンバーが男性だけというところ

ろがすごく気になる。総務の部分で女性の名前が入っていることは確認できるが、ぜひ代表の部分にも女性を入れていただきたいと思う。

(団体)

そういった部分も考慮しながら進めていきたい。

(2) つながりあはず

ア 企画説明 <団体>

イ 発言等

(川村委員)

実施体制としては今、スタッフは何人くらいいるのか。

(団体)

スタッフは7名程であるが、それ以外で関わっている方が60名程いる。

(千野委員)

この事業テーマとなっている「垣根を越えた」の「垣根」とはどういうことを想定しているのか。

(団体)

どうしても悩み事があると、相談支援の場に出向くことが多いと感じるが、支援員や相談員と相談者という仕事上の関係で出会ってしまうと、なかなかその立場を越えることが難しいということを感じている。そのような場所が不要ということではなく、そういった場も必要だけれども、例えば、夜の9時頃、ちょっとつらいと思ったときに連絡を取り合えるような、悩みを抱える人と相談に乗る人との間にある垣根がないような状態をつくりたいと考えている。その関係性は、こちらが作ろうと言うのではなく、自然に人と人が出会い、お互いがお互いを知り合い又は仲間だと思えるようなきっかけを作っていくために、垣根を取ったような場を作りたいと思っている。

(千野委員)

一対一でということか。

(団体)

一対一の場合もあるが、そうではない場合もある。人によってやりやすさはあるため、その人に合った方法を取る。

(弓削委員)

協働パイロットであるため、協働の部分がどのような部分なのか、それがこのパイロット事業として妥当なのかということを考えたい。提案の中では静岡市に担ってほしい役割が5つ書き出されているが、団体としてこれまでの経験の中で、市と全く協働してこなかったわけではないと思う。その中で、これまで市に既に協力してもらっている内容はどのくらいあるのか。

(団体)

市はライフデザイン事業を5年間やってきているので、その部分の伴走というところは既に一緒に実施している。実際に叶ってないものもあるが、市に担ってほしい5項目は、随時この5年間で一緒にやってきたところではある。

(弓削委員)

会場確保も市に担ってほしい項目に入っているが、普段の団体の活動を番町市民活動センターでもやっているということであれば、会場確保の部分は協働になるのかと感じた。

(団体)

今回パイロット事業に応募した一番大きな理由は、静岡市ライフデザイン事業が終わり、今年度からなくなったということ。この5年間でよく聞かれたのが、「静岡市の主催だったから安心して参加ができた」という声で、参加者の8割ぐらいが静岡市の主催だということに安心感を持っているということがわかった。まだ出会っていない方に会うためには、やはり行政との連携が必要だと感じている。これまで自分たちで工夫しながらやってきたが、団体の力だけでは予約できない場所もあり、市と協働することによってオペレーションがスムーズにいくということを学んだ。それぞれの強みを出し合って、より困っている人や孤独を感じている人と出会いたいという思いが、行政との協働する意味だと感じている。

(石川委員)

行政でなかなか手が届かないところという部分で、価値があると感じた。また、クラウドファンディング等を取り入れて資金調達をしていくという部分も良いと思う。今後は行政の看板ではなく、団体としての看板で人を呼べるといいと思う。

(団体)

団体として、あってないような場所でありたいと思っている。通りすがりの駅のような、行けば必ずあるけれど、自分の都合で使いたいときは使って、合わないときは行かなくていい、というような場所であり続けたいと思っている。

(川村委員)

対話というとな対一をイメージしてしまうが、複数人のグループのような感じで実施するということで、自分の想いだけでなく、他の人の想いを聞き入れることができるような場をぜひ作ってほしい。

(団体)

オープンダイアログや、リフレクティング等といった手法を取り入れつつ、一対一だとどうしても強い意見の方に偏ってしまいがちであるため、複数人で行うことで他の人の想いを聞き入れることができるような場づくりを実施していきたいと思う。

3 採択事業審査

ア 継続事業の採択可否

(事務局)

まずは継続事業について前回の書面審査で疑義があった事項について、特定非営利活動法人ESUNEに対し照会を行った。団体からの回答書も踏まえて、継続事業3つについて決定可否をご審議いただきたい。

(川村委員)

一次審査の際にESUNEに対して出した質問については、しっかりした回答が出てきている。他の継続事業であるグリーンパークあさはたやBASSplusは一次審査の時も比較的安定した運営が見込まれていたため、その点については問題ないかと思うが、ESUNEについてはどうか。

(弓削委員)

昨年度の事業でESUNEが作成したガイドブックについて、中学校の先生が欲しいと言っている。中学1年生の総合的な学習の時間で、まち作りについてステップを踏んで考えるような取り組みをしてみたいということで、このガイドブックを使用したいとのことであった。また、中学生と大学生との接点をうまく作れないかという思いもあるようで、その場合はESUNEに直接アプローチすることは可能か。

(事務局)

採択された場合の話にはなるが、今回行おうとしている事業では、プラットフォームを作っていくことなので、ESUNEあるいは協働担当課の大谷・小鹿まちづくり推進課に話をさせていただいても繋がれると思う。

(弓削委員)

プラットフォームという中では地元中学校も入っていると思う。うまく地元ともつながっていくことができれば、事業として今後が楽しみになる。

(川村委員)

実際に中学校みたいなところと連携することで、少し事業の輪郭が見えてくるかなという印象。

(弓削委員)

先生としては、単発ではなく、できれば息長く実施したいと考えているため、そういうことを考えるスタートにできるのはいいことだと思う。大学生と中学生が話をし、地域のまちづくりが実働していくというのは非常に良いものになると思う。

(川村委員)

それでは、継続の提案事業については採択候補としないこととしてよいか。

(全委員)

異議なし

(川村委員)

先ほど弓削委員が申し上げたように、中学校から話があったということについては、事務局からESUNEに伝えていただいて、ぜひそこから広がりをつなげていてほしいと思う。

イ 新規事業の採択可否

(事務局)

採点結果を参照し、委員長を中心に採択団体の決定をしていただきたい。なお、新規事業に採択される事業は、各審査委員の評価点の合計が260点以上であることを要する。各審査委員の評価点の合計が260点を超えた団体は、静岡の未来を拓く会の312点、つながりあいの281点である。

また、協働パイロット事業の予算は、新規事業と継続事業の両方を合わせて3,000,000円である。継続事業3件を採択するため、3,000,000円から継続事業分1,600,225円を控除し、残額の1,399,775円が新規事業採択に充てられる金額となる。

(川村委員)

つながりあいは、確かに去年、会場費がすごく高く見積もりされていて、もう少し安いところできないのかということを開いた記憶がある。でも今回は去年駄目だったところを一生懸命考えて提案に至っていると感じる。

(千野委員)

つながりあいは、ホームページやSNSもあって情報発信されているが、団体としての体制がまだ少し、しっかりしてないと感じた。規約や会計報告など、それらをきちんと公開すれば、助成金や他の補助金も集められるようになると思う。

(川村委員)

氷河期世代はこれからすごく大きな問題になりそうだと思う。孤立や低収入というのはすごくあるので、その人たちが全く繋がれていないというのは、社会基盤として公平ではないのかなと。少しでも誰かと繋ぐことができるネットというのは、たくさんあった方がいいと思うので、分かり合いたいという人たちがそこで少しでも拾い上げることができるのであれば、事業としてはいいのかなと思う。

(千野委員)

静岡の未来を拓く会については、管理体制において先生色が強いところが少し心配である。

(石川委員)

高校生の取組は期待したいが、フレームワークを担う先生の部分が見えてこない気がする。

(川村委員)

先ほども申し上げたが、団体の中心を担うメンバーに女性を登用してほしい。静岡市は他の政令市と比べると、まだまだ女性登用が少ない。

あとは、元校長先生たちなので、指導するといったことは、高校生たちがそこまで求めてないような気がする。高校生に頼っていくということはあるかと思うが、どういったところで高校生たちの姿勢が担保されるかが気になる。

(弓削委員)

高校生にプレゼンしてもらいたかった。もしくは一言でもいいから何か動画を撮っておいてくれたらよかった。今回のプレゼンでは、それが本来必要だったと思う。今こう思っています、本当にやりたいんですっていうのを、高校生本人の口から聞いたかった。

(千野委員)

本当に支援が必要な子たちをどう救ってくれるのか。

(川村委員)

地域との連携性という部分で城北高校と城北小学校は繋がっているとのことであつたが、もう少し広く捉えてもいいのかなと思う。

(弓削委員)

情報発信するなどして、城北地区以外の地域でも広げてほしい。

(川村委員)

高校の部活と繋がっていけば、継続性が担保されると思う。今回はこういった形で高校生が居場所づくりに関わるということであるが、高校生の関わり方としては、地域防災など様々な形はあるような気がする。

(弓削委員)

つながりあいずもそうだが、あまり目的化しすぎるとハードルが高くなる。つながりあいずの対話という部分においては、別のことをするついでに話をするといった方法もあるので、料理やスポーツなど、様々な切り口があればまた楽しいかもしれない。

(川村委員)

それでは、新規提案で2次審査対象となった2事業のうち、各審査委員の評価点合計が260点を超えている2事業全て（静岡の未来を拓く会、つながりあいず）を採択候補とすることとしてよいのか。

(全委員)

異議なし

4 事務連絡

5 閉会

以上、この会議録が正確であることを証します

署名人 川 村 美智